

同期型教育へのチャット導入に向けた予備的考察

A Preliminary Study about the Introduction of Chat System for Synchronous Education

八木 秀文[†] 鈴木 克明[†]
Hidefumi YAGI[†] Katsuaki SUZUKI[†]

[†] 熊本大学大学院 社会文化科学研究科 教授システム学専攻

[†] Instructional Systems Program, Graduate School of Social and Cultural Sciences, Kumamoto University

要約: 同期型遠隔教育で利用されるチャットは対面授業への導入も試みられている。チャットは内容吟味可能で、他者からの否定的評価による恥という大学生が授業中に質問しない原因を低減し、また口頭発表を恥ずかしいとする学生の心理的障壁を低くすると思われる。一方、チャットには授業に集中できない等の問題があり、単なる導入は学生の負担増になることもある。そのため掲示板の併用や発言時間確保等の工夫が必要と思われるが、社会人学生の場合、加齢等による理由でチャットを利用し辛いことが考えられ、Web カメラを支持する可能性がある。本稿では、チャット・Web カメラに対する利用意識、対面／遠隔、実名／匿名でのチャット発言に関して、学生の年齢を加味した仮説とともに今後の研究の方向性を示す。

キーワード: 質問行動、発言行動、学習環境、チャット、e ラーニング、同期型遠隔教育

1. はじめに

日本の学生は質問をしないと指摘されることがあるが、藤井・山口(2003)も授業時間外の個別質問は多いものの授業中の質問が少ないとする。ただし、これらは対面型集合授業でのものであり近年では授業を遠隔地の学生にライブ配信する同期型遠隔教育が実施されることも珍しくない。

その同期型遠隔教育に必要な双方向性の確保手段としては主にチャットや Web カメラ等が考えられるが、特にチャット採用の授業においては、対面型集合授業に比べて学生の質問行動に違いがあるように思われ、中嶋(2005)もチャットによる学生発言の活発化を報告している。

そこで本稿では、同期型遠隔教育および対面型集合教育にチャットが与える影響を考察し、遠隔／対面を含めた同期型教育へチャットを導入する際の留意点およびその影響について検討する。

2. チャットがもたらす効果

大学生が授業中に質問しない理由として、川崎(2008)は他者からの否定的評価を受け、“恥をかく”ことの問題を反映していると指摘する。すなわち「馬鹿だと思われたくない」等の意識が働くと理解することができるが、ここにチャットが介在する場合、次のような影響が考えられる。

まず、発言内容を吟味できるという点である。口頭と記述による質問では紙での質問のほうが抵抗感が低い(秋田,1995)というが、チャットは発言直前までは紙での質問と同じく質問内容を整理して作成することが可能になる。つまり、発表しても大丈夫であろうと自らが思える内容に吟味することが可能になり、他者からの否定的評価による恥を回避しやすくなると思われる。そしてそうして吟味したものであれば、授業中に発表するか、授業後に質問するかという判断を行うとき前者を選択する者が増える可能性が考えられる。

次に、口頭発表の必要がないという点である。同じ「恥ずかしい」でも、「こんなことを質問して馬鹿だと思われたら恥ずかしい」と、「発言自体が恥ずかしい」では意味合いが異なるが、人前での発言自体を恥ずかしいとする学生の存在は否定できない。そのため、このような学生の場合、恥ずかしさを低減する環境等があれば質問行動を起こすということが考えられる。彼らにとっては、実名チャットであっても口頭発表ではないという影響が強く働くと思われ、特に非対面となる遠隔教育において大きく影響するものと思われる。

3. チャットの問題点

和田(2004)は、授業へチャットを導入した時の問題点として、①授業に集中できず意識がチャットに向く、②授業と関係のない話やおしゃべりになる、③匿名による無責任な発言、④教員は授業中であるため関与できない、を指摘している。

このうち①、④については、授業とチャットが平行して実施されることによる弊害であろう。このため授業を一旦止めるなど、チャットによる発言時間を設ける等の工夫が必要になると思われる。また、②、③については、学生間では匿名でも教員は発言者を特定できるというシステム側の改良によって対応することになる。

一方、このような一般的に指摘されやすい問題に対し、学生の加齢による問題はあまり検討されていないように思われる。幅広く大学生を捉えたとき、社会人学生の存在は無視できず、同期型遠隔教育では遠隔受講の社会人学生が含まれることも多い。そして、高齢者ほどキーボード操作が苦手であったり、老眼等、加齢によってモニタのチャット文字が見難くなるという問題が考えられる。そのため、必ずしもチャットでの質問・発言を支持するとは限らず、むしろ教室での口頭発言や Web カメラによる発言をやりやすいと感じる(期待する)ということも考えられる。

また、社会人学生は相当の社会的経験を有していると考えられ、質問することを恥ずかしいとする人も少ないのではないかと思われる。川崎(2008)は、大学生が質問行動をとれるか否かは恥への対処方法を身につけているかどうかであるということを指摘するが、多くの経験を積む中から社会人学生は恥への対処方法や度胸を身につけていると考えられ、必ずしもチャットでの質問発言を支持するとは限らないと思われる。そして上記の加齢による問題を考えた場合、対面型集合教育においてチャットが採用されても口頭発表を支持し、同期型遠隔教育においてもチャットよりも Web カメラを支持する可能性が考えられる。

4. チャット導入時の留意点

畠中ら(2000)は、予想以上にチャットが学生に負担を与え、チャットでも質問がでなかったとしている。これは中嶋(2005)とは相反する結果だが恐らくこの負担は、他者からの否定的評価による恥を嫌う精神的負担と、従来の講義の中でチャットによる議論を強いたことによる作業的負担ではないかと思われる。そのためこの場合、まずは匿名チャットの導入が有効であると思われる。鈴木(2002)が匿名チャットの有効性を示しているが、自分が誰なのか相手に判らない環境は、間違いや恥に臆することなく発言を可能にすると考えられ、新たな技能や知識の獲得を目指す場面で意欲を高めるために必要となる「恥をかくことなく誤りを犯せる自由」(Keller&Suzuki,1988)を与えるものと考えられる。

また、議論のすべてをチャットで行うのではなく、非同期掲示板を利用したり、口頭議論を中心に据え、匿名チャットをサブシステムとして利用することも学生の負担低減に有効と思われる。同時に、遠隔／対面を問わず、チャットでの議論に難しさがある以上、単発の質問・発言までに留めることも、チャットの限界を知り、有効に活用するために必要なことであると思われる。

ただし、社会人学生が多い場合は、加齢による問題がある一方で恥への対処法を有すると期待されるため、チャットのみでなく、Web カメラ等複数の方法を使い分けられる環境が望まれる。

5. 仮説と今後の課題

以上の検討結果から、実名チャットについて次の仮説を示す。①チャットと教室発表ではチャットの方が質問・発言をしやすいとする学生が多いが、その傾向は若年層に強く、高年齢層では教室での質問・発言を支持する割合が増える。②同期型遠隔教育の双方向性確保手段としてチャットと Web カメラを比較した場合、チャットが多く支持されるが、その傾向は若年層に強く、高年齢層では Web カメラを支持する(期待する)割合

が増える。③演習、実習を除く授業における学生の質問・発言は、チャット採用の対面授業に比べチャット採用の同期型遠隔授業の方が多くなる。

今後これらの仮説を検証する必要があるが、若年層の学生が多い大学での調査だけでは難しいため、社会人学生が多く、同期型遠隔教育を実施している大学での調査が必要になると思われる。

また、同期型教育へのチャット導入が学生発言を喚起すると認められる場合、次段階として成績や学習動機づけとの関連性が視野に入ってくる。学生が積極的に発言しやすい環境は、学生個人だけでなく、クラス全体の理解促進とともに成績向上も期待され、授業への参加意欲へ影響すると考えられる。「わかる」や「楽しい」は、ARCS 動機づけモデル(Keller,1983)で示される自信や満足感へ繋がるものであり、動機づけとして極めて重要となるからである。

中学においては竹下・岡田(2008)が、成績と匿名チャット回数に正の相関関係、実名チャットでは負の相関関係があるとするが、日本の大学生は動機づけや問題意識の点で成人学習者と言い切れない部分もあるため、上記仮説に加え、④匿名チャットと実名チャットを比較したとき、若年層大学生では匿名チャットによる質問・発言の増加とともに成績向上がある、の検証も行いたい。そして、将来的にはチャット発言頻度やその内容と出席状況・成績等との関連性を検討したい。

参考文献

- (1) 秋田喜代美 (1995) 入門としての「心理学」に対する授業観と質問行動, 日本教育心理学会総会発表論文集(37), p.124
- (2) 川崎直樹 (2008) 大学生の質問・発言行動と恥への対処行動との関連, 北翔大学人間福祉研究 Vol.11, pp.149-157
- (3) 鈴木右文 (2002) 英語教育における仮想空間と文字チャットの効果, メディア教育研究, No.9, pp.51-64
- (4) 竹下浩・岡田行弘 (2008) 同期型 e-learning における学習者特性とインタラクションの分析, 日本教育工学会論文誌 Vol.32, No.2, pp.149-156
- (5) 中嶋航一 (2005) TIES の挑戦, メディア教育研究 Vol.2, No.1, pp.43-54
- (6) 畠中晃弘ほか (2000) 講義におけるチャットを利用したコミュニケーション促進の実験, 電子情報通信学会技術研究報告.KBSE.知能ソフトウェア工学 100(91), pp.7-12
- (7) 藤井利江・山口裕幸 (2003) 大学生の授業中の質問行動に関する研究, 九州大学心理学研究 Vol.4, pp.135-148
- (8) 和田公人 (2004) 失敗から学ぶ e ラーニング, オーム社
- (9) Keller,J.M.(1983).Motivational design of instruction.In C.M.Riegeluth(Ed.),*Instructional design theories and models*,pp.383-434.
- (10) Keller,J.M.,&Suzuki,K.(1988). Use of the ARCS motivational model in courseware design.In D.H.Jonassen(Ed.),*Instructional designs for microcomputer courseware* ,pp.401-434.